

私たちの大切にしたい相談活動

第1回 相談活動で大切にしたいこと

NPO法人 福祉広場
池添 素

二つ目は、相談者が問題解決の手がかりをつかみ、生きる力を得る相談活動です。「だからイヤばかり言っている子どものことがよくわかった」と思える発達相談はこれにあたります。しかし、そこまで到達するのはかんたんではありません。発達検査の結果だけを伝えても保護者はよくわからないことが多いのです。保護者のほんとうに解決したいことを正確に理



子育てを後押しする

「困る」から「悩む」のか、「悩む」から「困りごとが増えた」のか、どちらが先かは難しいところです。いずれにしても、生きているとさまざまなことが起り、悩みが尽きません。また、情報が溢れかえり、悩まなくてよいこと

と聞かれましたが、お母さんは話をじっくり聞いてもらえる気がしないで、「とくに何もないです」と帰ってきたそうです。その後私のところに相談に来られて、「話を聞いてもらえる気がなくて」と言わせていました。相談を受ける側は、何に困っているのか、子どもの状態はどうかなど、情報がほしいいろいろ聞くことをします。

Bちゃんは4歳になつたばかりです。保育園でみんなと同じことは、崩してはいけないことだと心に刻みました。そして私は相談の最後に必ず「今日は話してみてどうでしたか?」と聞くようにしています。「十分話せた」「頭が整理できた」「話してよかったです」などのお返事がいただけるように努力したいと思っています。

みんな悩みは深い

「でも気になります。特に最近は

「発達障害児の子育て」に関する

本や子育てブログ、ネット情報は山盛りです。「こうすれば発達障害児はうまく育てられる」的なタイトルは、魅力的で、つい手にとってしまう

相談は、育児相談、発達相談、教育相談、生活相談など、ジャン

ルに分かれて相談窓口が開かれています。最近は、相談支援という事業が始まっています。「相談」と銘打たれていますが、利用計画を作成することが目的です。利用できる社会資源との折り合いや、児童の場合は子どもにふさわしい生活と保護者の意向とのすり合わせなどを、計画に落とし込むことが最優先となります。その前提となる基本相談には報酬がつかないことも問題になっている事業です。

この連載では、子どもの生活や療育、発達検査など、子どもや保護者への支援を、相談活動の実践を通して考えます。療育の場で、「いつもゆっくり話を聞いてもらえたことが子育ての力になった」、「子どもの発達や障害のことをわかりやすく話してもらえたので、子どもの困った行動につき合えた」などの声をいただく相談活動は、育てにくい子どもを育てる保護者の子育てを支える大切な活動です。

相談活動とは

「何かを相談する」という作業は、「相談したい意思」をもつ人と、それを聞く人がいて初めて成立します。しかし、「話した」と「聞いた」だけ相談活動とは、育てにくい子どもを育てる保護者の子育てを支える大切な活動です。

Aちゃん(2歳8ヶ月)のお母さんは、ことばの発達が心配でクリニックを訪ねました。たくさん質問されましたが、お母さんの心配ごとや困りごとは聞いてもらえませんでした。「様子をみましょう」とその日は終わりました。二度目に「その後はどうですか?」

相談者が「相談してよかつた」と思える相談活動には高い専門性が求められます。その一つ目は、相談者が話したいと思える第一印象や信頼性が感じられることがあります。話してもらえることは当然ではなく、話したいと思える条件が整わない相談は、表面的な形式上の相談にしかならず、聞いた側の自己満足で終わります。同時に相談した側からすると「せっかく相談したのに、なにも答えをもらえないかった」と不全感が残ります。

しかし、これではお母さんの心配に見合った報告にはなっていません。すぐに「どうしたら1歳の遅れは取り戻せますか?」「5歳になつたら4歳になりますか?」と質問されました。発達段階や発達課題を保護者に理解してもらうことはとても難しくさらに、発達がゆっくりのわが子を受け入れることに高いハードルがあるからです。発達の説明より、みんなと同じことができるようにするための方法が知りたいのです。となると、みんなと同じことができないところお母さんのキモチを聞くことが発達相談のスタートです。パパが子どもに厳しい、おばあちゃんが、ママの育て方が甘いからだと言われていることなどが明らかになつきました。お母さんが家族に話せる勇気と自信につながる相談ができれば、学童期や青年期での子どもの困りごとにしっかりと向き合える、子育ての強い根っこになります。相談者の想いの

最後に、障害児を育てる保護者と先生とでつくっている山口県萩市のすまいるの会で聞かせてもらったお母さんのお話でしめくくります。「保育園や療育の場で、子どものできないことばかりを聞かれました。先生方は、子どもの困りごとを私に聞かせて、一歩足を踏み出してほしかったのだと後でわかりましたが、そのときは先生を困らせている子どものことを謝るしかなかった」と話されました。そのとき、「どうしたらよいのですか?」と聞けたら、叱つてばかりで子どもを苦しませなくてよかつたのに、と振り返ります。相談活動は、お母さんの気持ちをひ押しする役割も担っています。

いっぱい話を聞いて、隠されてる困りごとを引き出して、保護者のできることをわかりやすく示し、子どものステキなところをたくさん伝えられる相談活動から、ママやパパに、この子を育ててよかつたと思ってもらえるパワーが広がることをねがっています。